無限

令和3年1月 189 いちはやく

発行日：2021.9.10

発行者：ウトナイ中学校3年2組

苫小牧市こども相談センター開設

児童虐待のないまちを目指して

近年、児童虐待に関するニュースが増えている。児童虐待のないまちを目指し、苫小牧市こども相談センターが開設した。児童虐待の現状を知るために同センターを取材した。

双葉町に完成した苫小牧市こども相談センターは、地域の児童相談の拠点となり、児童虐待の防止を始めとした様々な取り組みを関係機関や地域と連携して行うために開設された。センターには、北海道庁苫小牧分室と、苫小牧市の機関である健康こども部こども相談課が入る。

児童相談所分室では、東胆振地域、日高地域を管轄とし、専門的な相談に対応する。子どもや家庭に対する援助・指導、児童の心理診断、一時保護・施設入所、市町村への支援など子ども業務としている。室蘭児童相談所の令和元年度の虐待対応件数は、5/3件にまでよりも迅速な対応が可能になったと考えられる。

一方、こども相談課は、子どもや家庭への相談・支援、子育て講座、家事や育児ヘルパー派遣などのサービス提供、関係機関との連絡調整を主な業務としている。

この二つの機関の連携を図ることにより、児童相談所と市役所がスムーズに情報交換をしたり、緊密に連携したりできるメリット、互いの機能を発揮して子どもや家庭への支援に当たることのできるメリットが生まれたという。

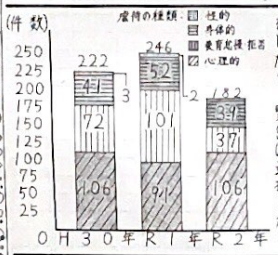
苫小牧市の児童虐待は、グラフの通り、過去三年間いずれも二百件近くと、少なくない。中でも言葉による脅し、無視や拒否的な態度を示す、兄弟姉妹間の差別的な扱い、子どもの面前でのDVなどの心理的虐待が増加傾向にある。

児童虐待が起きる背景には、親自身の育ちの問題や貧困、子育ての負担感など、心理的・社会的な要因が複雑に絡み合っている。昨年から今年にかけては、新型コロナウイルス感染症の影響により、自宅で過ごす時間が増えたことも要因の一つと考えられる。

これら児童虐待が子どもに与える影響は大きく、子どもの人権を著しく侵害し、心身の成長や人格の形成に重大かつ深刻な影響を与えるほか、更なる児童虐待の連鎖を生み出す可能性があると言われている。

市内の児童虐待は、近隣・知人の通告により発見されることが多いという。児童相談所苫小牧分室の板橋さんは、虐待を防ぐためには「誰かに相談すること、外に発信していくことが大切だ」と語った。

こども相談センターの開設が、児童虐待のないまちを目指す大きな一歩となるとして、期待が高まる。



東日本大震災から十年たった今

二〇一一年三月十一日午後、三陸沖で、最大震度七を記録した東日本大震災が起こった。あの悲劇から今年で十年。皆さんは何を思うだろうか。

私達は、修学旅行で、被災地を訪れ、被災された方の話を聞いた。実際に津波の来た三陸海岸をめぐる、三陸鉄道に乗った。車内では乗務員の方が、その場所はどんな被害にあったかを熱く教えてくれた。命をつなぐ未来館では泥だらけの小学生の帽子や、汚れた行事黒版、そして津波が来た直後の写真を見て、自然災害の恐ろしさを身にしみて実感した。津波遺構として保存されている、たろう観光ホテルでは一・二階は完全に破壊され、鉄骨がむき出しになった姿に言葉を失った。ホテルの前に広がる大きな海。このきれいな海があの日、一瞬にしてこの町を壊したなど、とても考えられなかった。

被災地の方々は明るく、優しく私達を迎えてくれた。だから、災害のことを教えてくれる時は涙ぐみ、言葉をつまらせながら話してくれた。

私達の住む苫小牧も海にほど近く、津波による被害にいつあってもおかしくない。どれだけの人が万が一に備えて準備をしているだろうか。心かけ次第で大きな被害が防げること、自分の命は自分で守ること、被災地の方々が辛さや苦しみを乗りこえ、語ってくれたことを忘れずに、伝えていくべきだと強く思った。

梅野先生の想いをのせて

開校から三年、ウトナイ宣言の一つである「歌声の響く学校」、その象徴である、ウトナイ中学校の校歌について、作詞・作曲をされた梅野知子先生に話を聞いた。

梅野先生は、校歌を作るにあたり、「卒業後も、いつでも口ずさんでもらえるような歌にしたい」という思いのもと校歌を作った。たそうだ。作詞に際しては、全校生徒から寄せられた校歌の歌詞に入れたい言葉に加え、「響きわたる歌声」や「自分の意志を持ち」など、ウトナイ宣言に関わる言葉が使われた。また、中川校長先生の「合唱の校歌を作ってほしい」との要望に応え、校歌の中では珍しい、混声三部合唱の校歌が完成した。

梅野先生が、初めて完成した校歌を聞いたのは、開校記念式典である。この時の感想を、梅野先生は、「歌の上手さ、下手さよりも、まず一番に一生懸命さが伝わった」、「混声三部合唱という珍しい校歌なので、これからもチャレンジして歌ってくれればいいと思った」と語った。

現在は、新型コロナウイルス感染症の影響により、合唱活動が制限されている。しかし、その中でも私達は、初めての校歌の演奏に関わった者として、梅野先生の思いを受けとめ、一年生、二年生に校歌の素晴らしさを伝えていかなければならない。そのためにも、今後行われる合唱推進委員による校歌プロジェクトに積極的に参加し、語りを持って校歌を歌っていきたい。

そして、この校歌がこの先も大切に歌い継がれていくようにしていきたい。

ウトナイ中三年間の歩み

開校三年目を迎えるウトナイ中学校。この三年間に対する校長先生の想いを聞いた。

平成最後の年、北海道で七年ぶりとなる新しい中学校の開校にあたり、「新しい時代の新しい学校」を創りたいと考えたという。また、自分で考え判断（自律）できる生徒を育成すべく校則を自由にしたそうだ。開校から三年で、様々な変化があった。開校時に比べ、生徒も教師も自分達でウトナイ中を創っていくという気持ちが大きくなり、地域の方の理解も深まった。校長先生は、この学校の一番の自慢は一人一人が自律して行動し、素晴らしい挨拶ができる「生徒」だと語った。

入学してからの三年間を振り返ってみると、校長先生の仰る通り、生徒の意識が変わってきたように思う。生徒会による様々な取り組みが行われ、それにより一人一人の意識が変化し、ウトナイ宣言が全校生徒に深く浸透してきている実感がある。

十一月、三年間の成果を発表するウトナイ宣言集会がある。これを機会に、皆さんもこの三年間を振り返ってみてはどうだろうか。

面接の極意

高校入試まで約六か月。入試では学力検査以外にも面接試験を取り入れている学校が多くある。そこで、今後の入試の準備に役立てるため、面接について調べた。面接をする目的は、書類だけでは分からない人柄などを知ることにある。卒業生が面接対策に使っていた資料によると、面接官が注目していると言われているポイントは、大きく四つあげられる。一つ目は態度だ。面接室への入り方や退出のしかた、服装、正しい言葉使いなど、中学生らしい振る舞いが求められている。二つ目は表現力である。質問に対して、自分の考えを筋道を通して答えられる力、分かりやすく伝える力が必要である。三つ目は積極性。自分から進んで意見や考えを言うことができるかどうか。その意欲も必要である。四つ目は熱意。その学校にどうしても入りたいという気持ちが伝わる。そこで、くるかということが面接全体を通して見られているそうだ。

面接に向けては、これらのポイントを押さえ、中学校での経験や高校生活についての思い、将来に向けての自分の考えをしっかりと整理し、練習を重ねる必要があるだろう。いざという時に焦せることがないよう、普段の生活から意識を高く持って過ごしていく事が大切ではないだろうか。

編集後記

私たちの新聞の題名である「無限」には、限りなく何にでもなれる、どこまでも広がっていけるという思いが込められています。製作を通して苫小牧の児童虐待の現状や、面接に関すること、校歌に込められた想いなどについて深く知ることができました。今回の取材で知ったことを今後の生活に活かし、成長していきたいです。最後に、製作に関わってくださった皆様に深く感謝を申し上げます。

オリジナル S 106